

中東という庭園に入れば、まだ花が満開とは言えないが…

アヴィ・モグラビ監督に聞く

(映画監督)

— アリ・アル＝アザーリのように多くのパレスティナ人がヘブライ語を流暢に話すけれど、あなたみたいにアラビア語を学ぶユダヤ人のイスラエル人は珍しいよね。

AM：恥ずかしいことだよ！ 私のアラビア語はまだとても下手くそだ。使う機会がなさ過ぎるんだ。イスラエル国内ではほとんどのパレスティナ人はヘブライ語を使いこなす。私の場合さらに悲惨なのは、父の実家では普段アラビア語を使っていたんだから。だけど我々はこう調教されている。アラビア語だってイスラエルの公用語なのに、無視され、隠された言葉になっている。

— 公式文書や標識、看板はたいがいヘブライ語だけだし、日本の大使館だってヘブライ語と英語だ。

AM：高速道路の標識はアラビア語も含めて3か国語だ。アラブ人が出口を間違えると困るとでも言うんだろう！

— 映画はあなたの家族の移民体験、つまりユダヤ人の流浪の話から始まるけれど、やがてアリの、つまりパレスティナの流浪と喪失の体験に移る。ユダヤ側の話もめったに聞かない体験だ。ホロコーストなどの迫害を逃れたヨーロッパからの移民、という話が常だし。

AM：うちの場合は流浪・亡命とは言えないよ。自由意志による、純粹に資本主義的な動機による移民、つまりテル・アヴィヴに来れば商売が繁盛すると思って来たわけだから。それに1948年か、47年までかもしれないが、中近東は開かれた地域だった。アラブ諸国でのユダヤ人の生活は、平和だったいい経験だったんだ。

— 映画で心惹かれる瞬間のひとつは、アリが1930年代のパレスティナ、レバノン、シリアの電話帳を持って来て、あなたの家族の住所を見つけたとき、文化の交流と混ざり合いの証拠を見出し、アリの方が喜んでいる。

AM：アリの哲学は常に、共存して分け合うこと、お互いを排除しないことだ。それにユーモアのセンスが凄い。例えば映画の終わり近く、彼の故郷だったサッフリアを最後に訪れるとき、カメラのテープが切れてしまい、すると彼はパレスティナ人にとって最も神聖な話を冗談で混ぜ返す。つまり帰還の権利の話を。もちろん、彼が自分たちの失ったものの大きさを忘れることは一瞬たりともない。でもユーモアの力で、彼にはイスラエル史の根源的な問題ですら多様な見方が出来る。

— ところであそこでテープが切れる、というのは本当に

ミスか、それとも演出なの？

AM：いやいや、この映画のすべてがその場で出来上がったという — 手紙以外はね。

— つまり映画の構成も、事前に決めていたことではまったくない？

AM：最初は父の従兄弟にあたるマルセルという人の人生を何場面か再現するはずだったんだよ。ベイルート育ちで、イスラエル独立の時もベイルート、その後もベイルートで暮らし続けた。それが50年代に突然ベイルートから姿を消してテル・アヴィヴに現れ、数ヶ月だけイスラエル軍に入り、そこでとても嫌な思いをして、ベイルートに戻ってしまった。そう、普通なら考えられない。脚本の少なくとも一部はアラビア語でなければならない。そこでアリに翻訳してもらうのでなく、一緒に脚本を書いてもらおうとしたんだ。

— つまり最初はメイキングを撮っているようなものだったと。

AM：そう。打ち合わせから撮影しようと思ったんだ。最初のミーティングでアリがああ電話帳を出して来たのには感激したよ。そうやってひとつのことが別のことにつながって、物語の背景となるうちの一族の話から始めて、やっと父の従兄弟の話に辿り着いた時には、もうその必要がない、映画が出来上がっていて、我々は満足だった。

— マルセルの話は映画化しないんだ。

AM：彼の話はなくなったけど、発想は生きてるからね。それに、手紙で出て来る人物の一方は彼がインスピレーションになっている。あの手紙が本物でなく創作だと言うと、残念がる人が多いね！

— え、作り物なの？！

AM：フランス語であんなにうまく私には書けないから、多くの人が参加してくれ、さまざまなニュアンスやディテールが出て来た。手紙を書いている女性が『庭園に入れば』という歌を「私たちの歌」と言うのも、私は知らなかった歌だ。それが映画の題名にもなった。手紙のシーンの映像は8mm撮影で、懐かしい感覚があるが、現代のベイルートだよ。そこに二重の意味性が生まれる。もちろん私は行けないのでベイルートにいる友人に撮ってもらった。撮影ぶんの9割は映画に使っている。ドキュメンタリーでは前例がないことだろうし劇映画でだってそうだろう。こうし

て素晴らしい映像が手に入ったし、手紙もとても美しく仕上がった。

— 以前の映画でもフィクションの要素をドキュメンタリーに取り込んでいたけれど、ユーモラスな、コメディ的要素だった。でもこの映画では、そのフィクションである手紙がいちばん心を打たれる。

AM：それはよかった！ いずれにしてもこの映画は以前のものとはトーンがまったく異なる。なにか嫌な事態とか問題を出発点にした映画ではない。共感の映画なんだ。

聞き手＝藤原敏史（映画監督）
2013年9月22日、Skypeインタビュー

（藤原敏史訳）

■上映

『庭園に入れば』【IC】 10/12 13:45- [A6] | 10/13 15:30- [CL]